

## 異性同士の絆——金原ひとみ『星へ落ちる』のバイセクシュアルな三角形と ヘテロソーシャルな絆—— 大木龍之介

### はじめに

金原ひとみは、2004年にデビュー作『蛇にピアス』（2003）で芥川賞を受賞した、日本の作家である。当時20歳であった彼女の『蛇にピアス』は、過激な性行為とピアス・刺青など肉体改造の描写が注目を浴び、ベストセラーとなった。金原作品の書評を多数発表する斎藤環は、『蛇にピアス』における非道徳的世界観の描出が「従来の文学者イメージの側からみたとき、かなり異質であった」（斎藤, 2009, p. 172）ことから、金原を非文学的な「ファンキー文学」の担い手と呼称した（斎藤, 2004, pp. 347-349）。そして彼女を非文学的な作家として位置付ける傾向は、残虐な性的嗜好を描いた第2作『アッシュベイビー』（2004）以降、より強固なものとなった（金原, 2007b, p. 12）。一方金原は、自身の非文学的イメージを払拭するかのよう、摂食障害をテーマのひとつとした『AMEBIC』（2005）、「精神科へ行こうと出掛けるが、結局行けずに帰る」というシチュエーションを綴った短編集『憂鬱たち』（2009）、震災後の心の揺らぎを多角的に捉えた『持たざる者』（2015）、姉妹の奇妙な関係を描いた『クラウドガール』（2017）など、幅広いジャンルの作品をコンスタントに発表し続けてきた。そして現在、彼女を「ヤンキー文学」にカテゴライズする批評は息を潜め、金原は短編「夏旅」（2009）で第36回川端康成文学賞最終候補、短編集『TRIP TRAP』（2009）で第27回織田作之助賞受賞、長編『マザーズ』（2011）で第22回Bunkamura ドウマゴ文学賞を受賞するなど、文壇の高い評価を獲得し続けている。そんな彼女が初の短編集として発表した作品が、『星へ落ちる』（金原, 2007a）である。

『星へ落ちる』は、作家の主人公である「私」<sup>1</sup>、その恋人の「彼」、そして「彼」の元恋人である「僕」のバイセクシュアルな三角関係を綴った、金原いわく「恋愛にアイデンティティーを求めていってしまうような、そういう最初から行き詰っている恋愛に、分かってて足を踏み入れてしまう人々」（金原&木村, 2009）を描いた作品である。本作は5編の短編小説から構成され、「私」

から「彼」への愛と不安を描出した「星へ落ちる」・「サンドストーム」・「虫」、  
「僕」から「彼」への情愛が綴られる「僕のスープ」、そして「私」の元彼氏  
「俺」の未練を描いた「左の夢」が収録されている。時系列としては「星へ落  
ちる」と「僕のスープ」がほぼ同時期、続いて「サンドストーム」、「左の夢」、  
「虫」の順であり、収録順もこの通りである。この構成は、「私」の時系列的心  
情を、「僕」と「俺」という他者の情感描写で挟む形となっている。作中では  
「私」が「俺」と別れ「彼」と関係を持ち、「彼」が「僕」の元を去り、「私」  
と「彼」が同居し婚約に至るまでの、それぞれの心情が描かれる。

物語において「私」と「僕」は、「彼」への愛情を募らせるにつれて、互い  
を強く意識し合うようになる。「私」が「僕」を恐れ、「僕」が「私」を恨み、  
「彼」への愛以上に互いのライヴァル関係を強固に構築していく様は、イヴ・  
セジウィックが提唱したホモソーシャルな絆——同性愛嫌悪と女性蔑視を抱い  
た男たちが、女性を取り合うことで築く、異性愛者としての男同士の絆——の  
バイセクシュアル版として捉えられるだろう。「私」から「僕」に対する恐怖  
心と「僕」から「私」に対する女性蔑視は、非対称的ではあるものの、互いの  
関係をエロティックな欲望から切り離す役割を担っている。つまり「私」と  
「僕」は、「彼」への愛情という欲望を模倣し合うことで、恋敵である互いのこ  
とを考えずにはいられなくなり、「ヘテロソーシャル」とも呼べる異性同士の  
絆で固く結ばれていくのである。本論の第1節では、まず「私」と「僕」の関  
係に焦点を置き、異性同士の絆がいかに関築されているかを、ルネ・ジラル  
の欲望の模倣理論と、セジウィックのホモソーシャル概念、そしてマージョ  
リー・ガーバーのバイセクシュアルに関する考察を参照しながら分析する。

同時に「私」と「僕」の両者は、「彼」を獲得しようとするほど、  
「彼」の存在を遠く感じるようになる——まるで積極的に「彼」を手に入れな  
いよう努めているかのよう。スラヴォイ・ジジエクによれば、欲望の本質と  
は、「欲望する行為」そのものである。つまり、もしどちらかが「彼」を手  
に入れてしまえば、「私」と「僕」は「彼」を欲望するという行為を、その成就  
によって失ってしまう。だからこそ、ふたりは積極的に「彼」のバイセクシ  
ュアリティによって構築される異性同士の絆を意識し続けることで、「彼」への  
欲望そのものを保持するために、欲望の成就を遅延するのである。

しかしながら、「僕」が「彼」のバイセクシュアリティによって培われる「私」との異性同士の絆を強く意識する一方で、最終篇「虫」では、「僕」との異性同士の絆だけでなく、「彼」のバイセクシュアリティそのものを意識することで欲望の成就を遅延する「私」の姿が描出される。まず第2節では、「私」と「僕」の「彼」への心情に着目し、それぞれが「彼」のバイセクシュアリティとそれに依拠する異性同士のヘテロソーシャルな絆によって「彼」の愛情の獲得という欲望の成就を遅延する様子を、スラヴォイ・ジジエクの欲望理論を中心に用いながら読解していく。続く第3節では、「私」が「彼」のバイセクシュアリティを獲得不可能な欲望の対象「対象a」として位置づけることで、欲望の成就の遅延をおこなっている様子を、「彼」－「私」－「俺」間の関係性を読み解くことで分析していく。そして「彼」の対象aとしての性質が、いかに「彼」のバイセクシュアリティに参加しているかを、語り手としての「彼」の不在を考察することで明らかにする。

## 1 「私」と「僕」の異性同士の絆

本節ではまず、「星へ落ちる」、「僕のスープ」、「サンドストーム」の3篇における「私」－「彼」－「僕」間のバイセクシュアルな三角形から、「私」と「僕」の関係に着目し、ふたりの間に構築される強固なライヴアル関係を、「ヘテロソーシャル」とも呼べる異性同士の絆として理解する。

『星へ落ちる』(2007a)の篇首に配置された「星へ落ちる」は、「私」と「彼」が東京タワーのふもとを散歩している場面から始まる。仲睦まじく談笑するふたりだが、「彼」の携帯電話に着信が入ることで、会話は中断される。「彼」の口から、電話の相手が「彼」の恋人であることが知らされると、読み手は「私」と「彼」の関係が、そこに「彼」の恋人を加えた三角関係であることを知らされる。そして、「彼の恋人は、きっと私の存在に気づいている。私の影に怯えている。でもそれは私も同じだ。私は、彼の恋人の影に怯えている」(p. 9)という「私」の心情は、「私」と「彼」の恋人が、所謂ライヴアル関係にあることを示している。

「私」は「彼」の恋人の存在に怯えている。「彼には彼の恋人がいる。それは元々知っていた。ずっと前から知っていた」(p. 24)と自分に言い聞かせ

る「私」は、常に「彼の恋人がその辺を歩いていて、気づいた彼が恋人に手を振ったり、恋人を抱きしめたりするかもしれないという不安」(pp. 9-10)に苛まれる。「私」による不安の吐露は、彼女が「彼」の存在と同等に、「彼」の恋人の存在を意識している状況を提示する。そんな中、「男同士の恋愛関係がどんなものなのか、私にはよく分からない」(p. 13)という一文によって、「彼」の恋人という不透明な存在が、男性であることが明らかになる。性愛を異性間のものとして当然視する読者の異性愛中心主義的予測が、金原の文彩によって見事に裏切られるのである。

しかし厳密に言えば、「彼」の恋人は文字通りの「恋人」ではない。「彼」とその恋人の関係は、「彼」の恋人である「僕」が語り手として登場する「僕のスープ」にて、詳細に語られる。かつて「彼」に好意を抱いていた「僕」は、「女みたいに束縛しないルームメイト、一等地のマンション、安い家賃」(p. 40)を提示することで、「彼」との同居生活を獲得した。そして、「干渉しない性格、面倒な事にならない関係、自由意志でいつでも解消できる関係をさりげなく宣伝」(p. 40)するにつれて、「彼」は「僕」に心を許すようになり、やがて体を求めるようになった。だが衣食住を共にし、性的な関係を持つものの、「僕」と「彼」の関係は「ただのルームメイト」(p. 44)であり、「僕」自身もそれを自覚している。

「僕」が「彼」との間に恋人としての関係を強く求める契機となるのは、「私」の登場である。「僕」が「彼」の携帯電話を盗み見た際、そこには「私」との親密な関係を示す内容が残されていた。「僕」は「私」の存在を知っていた。以前、「彼」が仕事で知り合った「私」について、「僕」に語ったことがあるからだ。「女の愚かさについて話しては僕と笑い合っていた」(p. 42)「彼」は、「私」については肯定的で、「僕」が彼女を蔑むような発言をすると、それに反論した。その反応に「いつもとは違うんだと感じて、途端に恐ろしくなった」(p. 43)「僕」は、「彼」が「私」に取られるのではないかと戦慄する。そして携帯電話の窃視によって「彼」と「私」との関係を突き付けられた「僕」は、「これまで二年間僕たちが歩んできた道は絶たれた。それも、一人のブス女の出現によって」(p. 41)と、「私」の存在を強く意識するようになる。同時に「僕」は、「今の状況を、浮気されてる、以外の言葉で考える事が出来な

い」(p. 41) と、「彼」が「私」と結ぶ親密さを浮気と定義するようになる。恋人ではないはずの「僕」が、「彼」と「私」の関係を浮気だと断罪することは、自分自身が「彼」の恋人としての立場を獲得するための、戦略として機能する。

僕だけの勝手な思い込みだけど、僕は浮気をされてる。いや、それは僕の望みだ。僕は浮気をされてると言いたい。なんで浮気するのと彼を責めたい。本当はそうやって、恋人としての権利を獲得したかったんだ。彼がああ女と付き合い始めて、初めて僕は自分の気持ちを認めた。  
(p. 41)

浮気という言葉を用いることで、「僕」は「彼」に浮気されている恋人という立場を手に入れる。同時に「私」を浮気相手と定義することで、「僕」は自身を「彼」の正式な恋人として特権化する。このように、「僕」は「私」の登場によって、「彼」との関係を「恋人」として説明可能にする。

上記の通り、「私」は恋人がいると知りながら「彼」への欲望を増幅させた。他方「僕」は、「彼」を奪う好敵手である「私」の登場によって「彼」への欲望を自覚し、恋人としての立場を獲得した。このことは、ふたりが「彼」という対象への欲望を、互いに模倣し合っていることを示している。欲望の模倣的性質を提唱したルネ・ジラールによれば、欲望とはつねに他者の欲望の模倣である (Girard, 1961/1971, p. 8)。ジラールにとって主体の欲望とは、欲望の対象に直接向けられるものではなく、対象を欲望する他者 (モデル) を模倣することで生じ、また同じ対象を欲望する者同士の間にはライヴアル関係が生じるという意味で、必ず三角形の構造を取るものである (Denier, 2007, p. 94)。この定式を体現するように、「私」は「僕」の「彼」に対する愛情を模倣し、「僕」もまた、「彼」と恋人関係になりたいという「私」の欲望を模倣している。

一方、ジラールの理論を発展させたイヴ・セジウィック (1985/2001) は、強制的異性愛の内部におけるふたりの男性が、ひとりの女性を取り合うライヴアルとなることで培う絆を、ホモソーシャルな絆と定義した (Sedgwick, 1985/2001, pp. 2-3)。セジウィックによれば、ホモソーシャルな絆には、男

同士の絆をホモエロティックな欲望から切り離すための同性愛嫌悪と、互いの関係を結ぶ導管として女性を利用する女性蔑視が必要不可欠であるという (ibid., 1985/2001, pp. 2-4)。

また、ジラールとセジウィックの理論をバイセクシュアルな三角形に応用したマージョリー・ガーバーは、バイセクシュアルの三角形において、バイセクシュアルな人物は常に三角形の頂点、すなわち媒体としての地位に配置されると指摘する (Garber, 2000, p. 433)。なぜなら三角形がバイセクシュアルの形態を取るには、ライヴァル同士が異なるジェンダーであると同時に、両者の欲望の対象が、異性愛/同性愛という二項対立では決定できないバイセクシュアルの状態でなければならないからである。ガーバーによれば、異性愛/同性愛の二項対立的構図におけるバイセクシュアリティは、一時的な異性愛的/同性愛的段階と見なされるが故にその存在を抹消される傾向にあるという (ibid., p. 87)。しかし、バイセクシュアルな三角形においては、異性愛的な欲望と同性愛的な欲望の両方の対象となることで、バイセクシュアリティが可視化されるのである。

『星へ落ちる』のバイセクシュアルな三角関係においても、バイセクシュアルである「彼」は常に欲望の対象＝三角形の頂点に配置されており、それによって「彼」を取り合う「私」と「僕」の間に、強固なライヴァル関係が構築されている。また「私」と「僕」の「彼」への欲望は確かに異性愛/同性愛的だが、「私」と「僕」が両者の欲望を模倣しているという意味でも、「彼」のバイセクシュアリティは両者の欲望の支柱となっている。しかし一方で、ホモソーシャルな絆とは異なり、『星へ落ちる』にて描かれる「私」と「僕」の強固な異性同士の絆は、「僕」から「私」に対する女性蔑視と、「私」から「僕」に対する恐怖心という、非対称的な感情によって結ばれている。

まず、「僕」から「私」への心情描写を読み解いていこう。「周囲の人に、浮気されてる男だと思われるなんて、しかも女に取られたと思われるなんて、耐えられない」(p. 49)とあるように、テキストでは「僕」の女性蔑視が繰り返し描かれる。「彼」が「夫の給料に頼って生きていくような専業主婦に関しては、寄生虫だと思っている」(p. 40)と考える「僕」は、「女みたいに束縛しないルームメイト」(p. 40)を理想化し、遊びに出掛けたがる主婦の友人を

「主婦の息抜きか」(p. 52)と蔑むなど、女性一般に対する嘲笑的態度を示す。しかし、「女の恋人なんかよりも、僕たち二人はずっと高尚で深い関係を持っている」(p. 42)と感じ、「彼」と共に女性を見下すことによって「彼」が女性と性的関係を持つことを容認することができた「僕」は、「彼」が「あの女〔私〕を庇うような事を言った」(p. 43)のを機に、「私」という具体的な対象を嫌悪するようになる。「〔「彼」は〕あの女とセックスするために、体を洗ってるんじゃないか」(p. 37)、「あの薄汚いブス」(p. 37)、「あの馬鹿女と、僕の違いは何だ」(p. 56)などの描写からは、「僕」による女性蔑視の矛先が、女性一般というよりむしろ、「彼」が「僕」と女性蔑視を共有しない唯一の女性である「私」個人へと向けられていることが読み取れる。そしてその怒りが、「僕」にとっての「私」の輪郭をより鮮明に象っていく。ライヴァル同士の絆は主体—欲望の対象間のそれと同程度に激しく強い、とするジラルの論の通り、「僕」から「私」へ向けられる女性蔑視の感情は、「彼」への愛に匹敵するほど色濃く綴られる。

「僕」が「私」に向ける感情が女性蔑視による憎悪である一方、「私」が「僕」に対して抱く感情は怒りとは異なる。三篇目「サンドストーム」にて、それまで「僕」の名前を知らなかった「私」は、「彼」の携帯電話の画面に表示された「僕」の名前を目撃してしまい、激しく動揺する。

彼の指の隙間から、見てしまう。途端に胸がぎゅっと締め付けられるように痛んだ。息を止めて、心臓の鼓動を抑えるように身を縮める。脳天が痺れるようになって、頭が真っ白になった。そうかだから、彼は私に教えなかったんだ。彼の恋人の名前を知ったら、何でかは分からないけれど、私はものすごく恐ろしい気持ちになってしまうと、彼は知っていたんだ。[...] 私の頭の中には一人の男がいた。名前を持った彼の恋人。今この瞬間にも自殺しているかもしれない人。私を殺したいほど憎んでいる人。(p. 69)

名前という実体性を持つことで、「私」は「僕」を、自分に激しい敵意を向けるライヴァルとして認識する。そして自殺未遂を繰り返す「僕」に対して、

「お願い死んでいて」(p. 81) と祈るようになるなど、「私」も「僕」を、「彼」との関係脅かすライヴァルとして位置づけていることが読み取れる。

「私」は「星へ落ちる」にて、「男同士の恋愛関係がどんなものなのか、私にはよく分からない」(p. 13) と述べる。「私」が同性愛を理解不可能なものと認識し、故に「わたしでない」ものとして棄却することで異性愛者としての自己像を強調する様子は、ジュディス・バトラーが展開する異性愛規範の構造と一致する (Butler, 1990/1999, p. 235)。しかし、こうした心情は「サンドストーム」にて、「男同士は、どこか違うだろうか。異性の恋人と同性の恋人、それがどれだけの違いを持っているのか、私にはまだ分からない」(p. 70; 強調筆者) と変化し、「私」が異性愛中心主義的な立場から移行している様子が伺える。また、「分からなくて、分からない事に引け目を感じたりもする」(p. 70) と吐露することや、「僕」が「私」に向けるような侮蔑的な用語を使わない様子からは、「私」が「僕」へ抱く感情が、「僕」が「私」へ向ける女性蔑視に対応するような同性愛嫌悪とは異なることが読み取れる。むしろ、知らない電話番号からの着信に「私を死ぬほど憎んでいるあの人じゃないか」(p. 73) と怯え、手首を切り人差し指が動かなくなった「僕」に対して「私のせいだと思っているだろうか」(p. 81) と考え、自殺未遂を繰り返す「僕」のせいだ「彼は来ないかもしれない」(p. 75) と悲観的になることから、「私」は「彼」との関係脅かす「僕」に対して、強い恐怖心を抱いていると言えるだろう。つまり、「僕」から「私」への強いライヴァル意識の根底に「私」への女性蔑視が存在する一方で、「私」が「僕」を強く意識する背景には、同性愛嫌悪というよりも「僕」という個人に対する恐怖心が存在しているのである。

これまでに例証した通り、「私」と「僕」による「彼」への欲望は、互いの欲望の模倣である。「私」－「僕」間のライヴァル関係は決して対照的ではないが、「僕」は「私」に対する女性蔑視を抱くことによって、「私」は同性愛に対する理解不可能性に引け目を感じると同時に「僕」を恐れることで、互いが互いに向ける強い感情を、エロティックな欲望から切り離しつつも、「彼」への愛と同程度に強化する。バイセクシュアルを欲望の対象とするライヴァル同士が、欲望の模倣を通じて結びつき合い、エロティックな欲望の可能性を排除しながらライヴァルとしての絆を深めていく構図は、ホモソーシャルな絆の異



性間版として捉えられる。つまり、『星へ落ちる』のバイセクシュアルな三角形では、異なるジェンダー/セクシュアリティのライヴァル同士が、バイセクシュアルの人物を欲望の対象＝媒体とし、男女間の性愛的結びつきとは異なるものの、しかし強固な情緒的絆を構築している。換言すれば、「彼」というバイセクシュアルの人物を媒介することで、「私」と「僕」という異なるジェンダー間に、男女間の性愛的結びつきとは異なる強固な異性同士の情緒的絆、すなわち「ヘテロソーシャルな絆」が構築されているのである。

## 2 バイセクシュアルな三角形と欲望の成就の遅延

前節では、「私」－「彼」－「僕」というバイセクシュアルな三角形における「私」と「僕」の情緒的結び付きを、ヘテロソーシャルとも呼べる異性同士の絆として位置付けた。しかし奇妙なことに、「私」と「僕」には、「彼」という欲望の対象を自発的に遠ざけていくような描写が見受けられる——まるでふたりの本当の欲望が、「彼」の愛を勝ち取らないことにあるかのように。本節では、「私」と「僕」の両者が、「彼」の獲得という欲望の成就を遅延する障害物として、異性同士の絆と「彼」のバイセクシュアリティを機能させていることを、テキストの分析によって確認する。

前述の通り、「僕」は「男に依存しきっている奴が大嫌い」(p. 40)で、「誰にも依存したくない人で、誰にも依存されたくない人」(p. 40)である「彼」のために、「彼の求める生活」に相応しい「干渉しない性格、面倒な事にならない関係」(p. 40)と「自由意思でいつでも解消できる関係」(p. 40)にある人物を演じ続けた。しかし、「ひりつくような嫉妬から解放される」(p. 47)のために「彼」との思い出のイタリアンレストランへ向かった「僕」は、「彼」が「私」とそのレストランを利用していた事実を知り、激しく動揺する。そして怒りを募らせた「僕」は、ついに「彼」を責め立ててしまう。「彼」との幸福な生活を象徴するイタリアンレストランを「私」に侵犯されたことを機に、「僕」は「不満も怒りも抑えられなくなって、何か疑わしいことがあればすぐに糾弾」(p. 52)するようになり、錯乱の末、自傷や自殺未遂を繰り返すようになる。「一緒にいて心地いいパートナー」(p. 52)とは相反する立場となった「僕」に対し、「彼」は「拒絶の強さ」(p. 57)を向けるようになり、やが

て「こんな生活耐えられない」(p. 80)と口走るようになる。

こうした「僕」の人物像は、「私」の元彼氏である「俺」の存在と重なり合う。「私」はかつて「俺」と同棲していたが、「彼」と出会ってすぐに「俺」のもとを去った。以来「私」は、一日に何十件も寄せられる「俺」からのメールと電話に、倦厭する。「俺」からの連絡にうんざりする「私」はしかし、「彼」[「俺」]の言葉をパソコンに打ち込んでみたらどう？」(p. 18)という「彼」の助言の通り、「俺」からの電話に出る度、その言葉を記録する。

「何でなんだよ。何度も言ったじゃない。無視するのだけは止めてくれて。お前が電話に出ないともう二度とお前の声聞けないんじゃないかって不安になるんだよ。[...]死ぬよ俺。このまま死んじゃうよ。どうしてだよ毎日手え合わせて祈ってんのにどうしてお前に会えないんだよ」(pp. 28-30)

「俺」の一方的な感情の吐露は、「何で嘘つくのいい加減にしてよ僕の事何だと思ってんの」(p. 57)、「もうね、駄目なんだ。[...]死ぬしかないんだよ」(p. 59)と「彼」に畳みかける「僕」のイメージと重なり合う。「私」は、「俺」を鬱陶しく感じる。そして「私」は、「彼」が「僕」の錯乱に辟易していることを知っている。だからこそ「この男のように、脇目もふらず自分の思いを伝える事が出来たら、私はもう少し楽だったのだろうか」(p. 27)と述べる「私」は、「辛いとも、悲しいとも、寂しいとも、愛してるとも、言ってはいけない。重いからだ」(p. 25)と、自身の感情を抑圧し、積もり積もった感情を「彼にだけはひた隠す」(p. 115)。つまり、「私」は明らかに、「彼」に嫌われないためには「僕」や「俺」のようにはなるまいと、一緒にいて居心地の良いパートナーという、かつて「僕」が演じていた理想像を模倣している。そしてその結果、「サンドストーム」では「彼」と同棲を始め、「虫」では婚約を結ぶに至る。

しかし、「私」はある奇妙な矛盾に苛まれる。「彼」との距離が近づけば近づくほど、「私」は「彼」の存在を、より遠く感じるようになるのである。「彼」との新居に引っ越した「私」は、「もしかしたら彼は永遠に、このマンション

に足を踏み入れないかもしれない」(p. 72) という一抹の不安を拭いきれない。「彼」の荷物が新居に届いてもなお、「捨ててもいいようなものを送って、しばし私を安心させておこうと思ったのかもしれない」(p. 82) と、「私」の疑心暗鬼は消えない。さらに物語の終盤、「私」と「僕」との間に奇妙な関係の変転が生じる。『星へ落ちる』の最終編「虫」にて、「彼」の領収書整理を手伝っていた「私」は、あることに気づいてしまう。

レシートを省いていく内に、同じ店のレシートがたくさんある事に気がつく。それは私も知っている店。彼が前に住んでいた家の近くの、アールデコ調のインテリアの、安くも高くもない、イタリアンレストラン。[...] 彼はあの人と会っていた。でも私はどこかで知っていた。無理矢理のように家を出た彼が、その後もあの人から電話やメールを受けている事、そしてきっとまだ、会っているという事。あの方は、彼がいつか自分の所に帰って来ると、信じているんだろう。だからあの方は彼を泳がせつつ、じっと彼を見張っている。(p. 120)

「彼」が「僕」と密会していることを確信した「私」は、少しずつ発狂していく。「仕事相手からの電話を無視しては、コックローチドリームをやっては、彼を待つ」(p. 121) 彼女の様子は、「彼」が浮気して家に寄り付かなくなり、仕事に身が入らずひたすら「彼」の帰りを待ち続けた、「僕」の姿と重なり合う。「僕」のような感情の露呈を抑圧する「私」は、抗鬱剤と精神安定剤を摂取することで、心の均衡を保とうと試みる。ここでは、「彼」との思い出のイタリアンレストランを侵害されることが、「私」と「僕」の混乱を促す引き金として、共通の機能を果たしていることが読み取れる。また、「毎日のようにあの方の愚痴をこぼしていた彼は、一緒に住み始めて以来、自分からあの方の話題を持ち出さない」(p. 123) という「私」の境遇は、同居生活が進むにつれて「あの方の話題を、自分からは持ち出さなくなった」(p. 43) という「僕」の状況と重なり合う。このように「私」は無意識的に、反面教師としていたはずの「僕」と共鳴し、異性同士のヘテロソーシャルな絆を強化していく。

抗鬱剤を飲んでいる「私」に気付いた「彼」は、「私」に対し「これからは

何でも、悩みがあったら話すんだよ」(p. 131)と優しい言葉をかけ、さらに「結婚しようよ」(p. 132)と婚姻関係を提案する。つまり「私」は、「彼と結婚したい。出来る事なら今すぐに」(p. 56)と述べる「僕」にとっての欲望の成就を、達成するのである。しかし、「本当に嬉しくて、もう死んでもいい」(p. 131)と思いつつ、それでも「私」は「僕」の存在を意識せずにはいられない。

私の頭の中に顔のないあの人がいる。あの人は彼と会って、どんな話をしているんだろう。彼らは一体どんな話をしているんだろう。彼らは手を握ったりキスをしたり、あるいはセックスをしたりしているんだろうか。彼らは私の話をしたりして、笑ったりしてるんじゃないだろうか。ばしゃばしゃと顔にお湯を受けながら気づく。いつの間にかあの人と私の立場が逆転している事に。私と彼の関係が浮気だった頃は、あの人が私の影に怯えていたのに彼があの人を去ってからは、私があの人影に怯えている。(p. 133; 強調筆者)

ここで最も興味深いのは、「立場が逆転している」という記述である。前述の通り、「彼」の理想の恋人になることを志していた「僕」は、「私」への怒りを増幅させ、「彼」を責め立てることによって、「彼」との同居生活を失った。その一方で、「私」への憎悪に基づく「僕」の行為は、「でも自殺するぞって、実際に脅されると、やっぱり怖くて放っておけないよ」(p. 70)という「彼」の言葉を引出し、「手首を切った恋人を探している。どこにいるのかも分からない恋人を捜して、奔走している」(p. 80-81)と描出されるように、「彼」の関心を引くことに成功する。しかし、「彼」の理想から遠退くことで手に入れた関心は、「心地いいパートナー」(p. 52)として「彼」の注意を引くことや、「彼の名字になりたい」(p. 56)という「僕」の欲望の成就を、遅延するものとして機能しているのである。他方「私」は、「僕」や「俺」を反面教師とし、自身の感情を抑圧することで「彼」との婚姻関係を勝ち取るが、「僕」への恐怖心を募らせることで、「彼から遠く離れてしまったような気持ち」(p. 123)になり、「近くにいたい触れたい感じたい」(p. 32)という欲望の成就を遅延

している。このようにテキストには、「私」と「僕」が異性同士のヘテロソーシャルな絆を強化することで、互いに「彼」の獲得という欲望の成就を遅延している様子が、度々描かれる。

ここで、「私」と「僕」による欲望の成就の遅延を理解する手立てとして、スラヴォイ・ジジエク(1994/1996)が論じた「宮廷恋愛」の理論を援用しよう。貴婦人と彼女を欲望する騎士の間に構築される欲望について述べたジジエクによれば、宮廷恋愛における騎士の本当の目的とは、貴婦人から常に試練＝延期を備給されることで、貴婦人への欲望を永遠に延期し続けることにある(Žižek, 1994/1996, p. 158)。このジジエクの考察は、主体が実質的に欲望しているものは、その成就という「絶望的な瞬間」を遅延し続けるために、欲望そのものを保ち続けることだ、とするラカンの考えに依拠している(Žižek, 2004)。つまり、欲望の主体が最も避けなければならない事態とは、欲望自体が成就によって達成＝消滅することなのである。

宮廷恋愛の観点から考察すると、「僕」が「彼」の理想的パートナーから逸脱すること、「私」が「彼」の存在を必死に遠ざけることは、「彼」の獲得という欲望の成就＝欲望の備給の停止を避けることとして理解できる。ここでは同時に、「私」と「僕」が互いを意識し合うことで異性同士のヘテロソーシャルな絆を強化する目的が、ライヴァルの存在によって欲望の成就を遅延し続けることにあるということも、読み取れる。「私」は「彼」を手に入れてしまえば、「彼」を欲望する行為そのものを失ってしまう。「僕」も同様に、「彼」が完全に「私」のものになってしまえば、「彼」を欲望するという行為そのものを喪失してしまう。だからこそ、『星へ落ちる』のバイセクシュアルな三角形においては、欲望の成就の遅延を手助けする有益かつ強力な存在として、互いに欲望を阻害し合うライヴァルが、必要不可欠なのである。セジウィック(1985/2001)が述べるように、ホモソーシャルな絆で結ばれた男同士が「男の利益を促進する男」(Sedgwick, 1985/2001, p. 6)として機能するのであれば、『星へ落ちる』のヘテロソーシャルな絆で結ばれた異性同士もまた、互いを欲望の成就という絶望的な瞬間から遠ざける、「男/女の利益を促進する女/男」として特徴づけられるだろう。

また、『星へ落ちる』における異性同士のヘテロソーシャルな絆による欲望

の成就の遅延は、「彼」がバイセクシュアルであることに大きく依存している。前述の通り、「僕」は、「彼」に女の恋人がいたことについて、「女の恋人なんかよりも、僕たち二人はずっと高尚で深い関係」（p. 42）にあると感じることで容認していた。また、「変えられないのは彼が本気になっている相手が女だという事実で、惨めな事に、もしそれが男だったとしたら、僕はこんなに惨めじゃなかった」（p. 44）と述べているように、「僕」の強い憎悪は常に「彼」が本気になっている女性である「私」にのみ向けられている。しかし、「僕」が女だったら、他の男に種付けしてもらってでも、妊娠を理由に彼をどうにか引き留めていただろう」（p. 53）、「一体僕の何が、あの女より劣っている。結婚出来るからだろうか。だから彼は女に惹かれたんだだろうか」（p. 56）、「やっぱり彼は、養子より妻が欲しいのだろうか」（p. 56）などの描写からは、「僕」から「私」への女性蔑視の背後に、「彼」と「私」の間に培われる異性愛的関係の可能性、すなわち「彼」のバイセクシュアリティが存在していることが読み取れる。つまり「彼」を欲望する「僕」は、「私」との異性同士のヘテロソーシャルな絆を深めることで、「私」と「僕」の両者に欲望される「彼」をバイセクシュアルの位置に留めているのである。この意味で、「僕」は「彼」のバイセクシュアリティを役立て、「彼」の欲望を一つの性との関係だけには固定させないことによって、「彼」の獲得という欲望の成就を遅延していると言えるだろう。

一方「私」は、「彼」の理想の相手を演じ、「彼」との親密さを深めれば深めるほど、「僕」をより強く意識してしまう。また同時に、「あの人と暮らしていたあの街のあの店で、あの人と食事をしている」（p. 123）、「彼が部屋の窓から抜け出してあの人の所へ行っているんじゃないか」（p. 128）という不安定な心情描写からは、「私」が「僕」へ向ける恐怖が、「彼」と「僕」との間に培われる同性愛的関係の可能性、つまり「彼」のバイセクシュアリティに基づいていることが読み取れる。この意味で、「彼」を欲望する「私」もまた、「僕」との異性同士のヘテロソーシャルな絆を深めることで、「彼」をバイセクシュアルの位置に留めていると言えるだろう。

### 3 「対象a」としての「彼」のバイセクシュアリティ

しかし、「僕」と「私」が互いに向ける否定的態度に差異があるように、両者の欲望の成就の遅延のあり方にも相違が存在することは、特筆すべきである。「僕」が「私」とのヘテロソーシャルな絆によって欲望の成就を遅延している一方で、「私」は異性同士の絆と同等に、いやそれ以上に、「彼」のバイセクシュアリティそのものを積極的に意識し、欲望の成就の遅延に役立てている。「虫」において「私」は、次のような不安に襲われる。

不意に今彼が私を裏切っているんじゃないかと思い始める。あの人かもしれないし、あの上司かもしれないし、あの男上司かもしれないし、あの同僚の女かもしれないし、あの同僚の男かもしれないし、あの接待相手の女かもしれないし、あの接待相手の男かもしれないけれど、どちらにしても彼が私を裏切っているような気がし始めてどうしようもなくなっていく。(p. 129)

「私」は「僕」だけでなく、「彼」のバイセクシュアルな可能性そのものに不安を覚えていく。もちろん『星へ落ちる』では、「僕」の語りが「僕のスープ」のみであるのに比べて、「私」の語りが「星へ落ちる」、「サンドストーム」、「虫」と三篇に渡って展開されるという分量の差は存在する。しかし、「僕」が「私」のことを一貫して性別を明示する「あの女」と呼称するのに対して、「私」は「僕」を、「彼の恋人」もしくは「あの人」という性別を明示しない代名詞で呼ぶことが多く、「彼氏」と呼称するのは「サンドストーム」の一部分(p. 75とp. 81)のみである。確かに、「私」は「僕」の「彼」への欲望を模倣することでバイセクシュアルな三角形を構築し、「僕」と異性同士のヘテロソーシャルな絆で結ばれている。しかし「私」は「僕」とは異なり、異性同士の絆と同等に「彼」のバイセクシュアリティを積極的に想像し、欲望の成就の遅延に役立てている。本節では、「私」が「彼」を獲得不可能な欲望の対象・対象aとして位置づけることで、欲望の成就の遅延をおこなっていることを、「私」と「彼」、そして「俺」の関係性を読み解くことで分析していく。

第一節で論じた通り、マージョリー・ガーバーはバイセクシュアルな欲望

の三角形において、バイセクシュアルの人物は常に三角形の頂点に属すと指摘した (Garber, 2000, p. 433)。『星へ落ちる』では、バイセクシュアルである「彼」は、欲望の三角形における「欲望の対象」として位置づけられている。しかし厳密に言えば、「私」と「僕」の本質的な欲望が「彼」を欲望する行為そのものである以上、「彼」は文字通りの「欲望の対象」ではない。むしろ「彼」は、ふたりの欲望を備給する「欲望の原因としての対象」である。「欲望の原因としての対象」としての「彼」の存在は、対象 *a* としても言い換えられる。ジジェク (2006/2008) は対象 *a* について、次のように説明する。

ここで忘れてならないのは、対象 *a* は欲望の原因であり、欲望の対象とは違うということである。欲望の対象は、たんに欲望される対象のことであるが、欲望の原因は、対象の中にあるなんらかの特徴であり、その特徴ゆえにわれわれはその対象を欲望する。(Žižek, 2006/2008, pp. 118-119)

前節で例証した通り、「私」と「僕」の本当の欲望とは、「彼」を欲望し続けることにある。この意味で「彼」は、ふたりに欲望を与える欲望の原因、即ち対象 *a* として機能している。また斎藤環は対象 *a* を、常に獲得不可能な欲望の原因であると説明する (斎藤, 2006, pp. 97-114)。「私」と「僕」が異性同士のヘテロソーシャルな絆と、その絆が依拠する「彼」のバイセクシュアリティによって「彼」への欲望の成就の遅延をおこなっていることは、前節で確認した通りである。しかしテキストからは、「私」が「僕」との異性同士の絆と同等に、「彼」のバイセクシュアリティを獲得不可能な欲望の原因=対象 *a* とすることで、欲望の成就の遅延を達成していく様子が伺える。「私」が「彼」のバイセクシュアリティを維持するための、「僕」との異性同士の絆以外の方法として、「私」による「俺」の拒絶が挙げられる。

前述の通り、「私」は「俺」からの執拗な連絡に辟易している。一方、「俺」は、「服が必要だから荷物を送ってくれ」(p. 88) という「私」の願いを叶えてしまえば、彼女と自分を繋ぎ止める物がなくなるという不安から、荷物の送付を躊躇う。ここからは、「俺」が欲望の断念の遅延を望む主体として位置



付けられていることが読み取れる。そんな「俺」に対して、「私」は「あの男の事を疎ましく感じていて、憎んでもいた」（p. 125）と嫌悪感を露わにする。しかし、「私」がそれを「彼」に伝えても、「彼」は「私」に、「俺」との関係性を絶つようには言わない。それどころか前述の通り、「後で俺が読み返せるように」（p. 18）と、「俺」の電話に出てその言葉をパソコンに打ち込んでおくことを要求する。

「俺」—「私」—「彼」の三角形において「私」は、「彼」と「俺」に欲望を向けられる、欲望の対象としての役割を担う。またこの三角形において「彼」は異性愛的欲望の主体として暫定的に固定され、「俺」—「彼」間にホモソーシャルなライヴァル関係が築かれる。しかし、「私」は執拗に「俺」を拒絶し続ける。「このまま自然消滅的に彼が私を捨てたとしても、私は絶対にあの男の元へは帰らない」（p. 79）と、かつて「好きで好きで仕方なかった事があった」（p. 125）元彼氏に対して、嫌悪感を募らせる。このことは、「私」が自発的に「俺」を遠ざけ、「俺」—「私」—「彼」という三角形から、「俺」を排除しようと試みる様子が読み取れる。そして最終篇「虫」では、ついに「俺」が「私」に荷物を送り、最後の連絡を交わす。「荷物を送ってもらう。そして、私は完全に、前の男から自由になる」（p. 125）、とあるように、「私」は「俺」との関係に自ら終止符を打つ。

興味深いことに、最終篇「虫」では、「星へ落ちる」と「サンドストーム」にて登場した、「私」に欲望を向ける男たちが一切登場しなくなる。「星へ落ちる」では、「海外アーティストのプロモーションビデオに出てくれる子」（p. 15）を探しているという男性と、「可愛いね」（p. 22）、「彼氏いるの？」（p. 22）と会う度「私」に声をかける同じマンスリーマンションに住む男性の姿が描かれる。一方、「サンドストーム」では、「乗馬に行こう、夜景を見に行こう」（p. 73）と電話とメールで「私」を誘うモデルの男性と、こちらも電話とメールで「今度食事でも」（p. 76）と声を掛ける、「彼」と観に行った映画の原作者である男性作家が登場する。そして「虫」では、こうした「私」を欲望する男たちの姿が一切描かれな。物語が進行するにつれて、「私」を欲望の対象とする男性は段階的に姿を消していき、そして最終的に「私」は「俺」を切り捨てる。つまり、「彼」—「私」—「俺」（もしくは他の男性）という異

性愛の欲望の三角形と、そこで暫定的に固定される「彼」のヘテロセクシュアリティは、「私」の手によって抹消されるのである。

「私」は「俺」と決別し、「私はもう、二度とあの男からの電話を取らなくていい。永遠に、関係を断ち切れる」(p. 127)と「一つ仕事をやり遂げたような気持ち」(p. 127)になる。しかしその直後に、「私」は「僕」の存在に怯え、「僕」ではない誰かと「彼」が「私を欺いて、誰かと私を嘲笑っているような気がしてどうしようもなくなって」(p. 129)いき、そして最後には第二節で引用したように、「僕」との立場の逆転に気づく。さらに「私」は最後に、「彼」と「僕」の関係に対する不安で食事を吐き出しながら、次のような感情を抱く。

泣きながら吐き続けて、私は思う。私はいつからこんなに惨めな生き物になってしまったんだろう。栓を抜いて、押さえいる指の隙間から、詰まらないように少しずつ吐瀉物を流しながら思う。彼が好きになってからだ。(p. 134)

これまでに確認した通り、「私」の「彼」への欲望は、「僕」の「彼」への欲望の模倣であった。さらに「私」は、「僕」との異性同士のヘテロソーシャルな絆を強化し、また彼女を欲望する「俺」やその他の男性を排除することで、「彼」を同性愛的な欲望でも異性愛的な欲望でも完全には獲得できない、そこからすり抜けてしまうバイセクシュアルとして位置づけた。「彼」のバイセクシュアリティが常に獲得不可能な欲望の原因として機能しているということは、「彼」が対象 $a$ としての役割を担っていることを示している。「私」は「僕」の存在に怯え、また「彼」のバイセクシュアルな可能性を積極的に意識することで、「彼」を手に入れられないままにいる。つまり、対象 $a$ としての彼のバイセクシュアリティが、「彼」への欲望そのものを保持し続けるという、「私」の本当の欲望を叶えているのである。

最後に、語り手としての「彼」の不在についても考察したい。『星へ落ちる』のバイセクシュアルな欲望の三角形は、「私」の手によって積極的に、「私」—「彼」—「僕」の三人の間に構築される。しかし、語り手として登場するのは、

「私」と「僕」、そして「私」の元彼氏「俺」の三人のみである。しかし、物語の核である「彼」は、不可解にも語り手として登場しない。それどころか、「彼」の存在自体が「A〔私〕、B〔僕〕」の視点からちらちらと垣間見えるだけ」（いしい, 2011, p. 180）であり、その異様なまでの不在性はまるで、「私」と「僕」が「生きながらに死んでいる相手」（池田, 2008, p. 150）に執着しているようにも感じさせる。

物語の構造上、「私」と「僕」が「彼」への欲望の成就を遅延し続けるためには、「彼」を語らせてはいけない。第一節で触れた通り、『星へ落ちる』のバイセクシュアルな三角形において、異性愛/同性愛の二項対立的な構図の内部で抹消されがちなバイセクシュアリティは、確かにその存在が可視化されている。しかし「私」や「僕」、「俺」のように「彼」が語ってしまえば、「彼」の主体位置は暫定的に決定され、ふたりの欲望を備給し続けるバイセクシュアルとしての、また常に不在である対象 $a$ としての立場を失ってしまう。それは「私」にとって、そして「僕」にとっても、欲望そのものを保ち続けられなくなる、絶望的な瞬間である。だからこそ「彼」の代わりに、「私」に欲望の断念を強いられた「俺」が語る主体に配置される。そうすることで「彼」は語り手から排除され、欲望の原因としての対象=対象 $a$ として、常に不在の状態に置かれるのである。そしてこの構成が、逆説的にもバイセクシュアルとしての「彼」の存在感を、一層強めていく。この意味で、「彼」を語り手として登場させない『星へ落ちる』の構造は、欲望の原因としての対象が常に不在でなければ主体は欲望の成就という絶望的瞬间を遅延し続けられない、という欲望の精神分析的テーゼを、バイセクシュアルな三角形における異性同士のヘテロソーシャルな絆の描出を通じて、鮮やかに提示していると言えるだろう。

## おわりに

『星へ落ちる』の登場人物たちは、誰ひとりとして名前を与えられない。語り手たちは「私」、「僕」、「俺」という一人称の代名詞を使って語り、語らない対象 $a$ は「彼」という三人称の代名詞で、他者によってのみ語られる。常に他者を通じてのみ描出される「彼」は、語り手として登場しないことでバイセクシュアルな対象 $a$ として、「私」と「僕」の欲望の成就を遅延し続ける。だと

したら、序論で引用した金原の「恋愛にアイデンティティーを求めていってしまうような、そういう最初から行き詰っている恋愛」（金原 & 木村, 2009）という言葉は、「私」と「僕」という恋愛にアイデンティティーを求めるふたりの欲望が、実は「彼」を手に入れないことで「彼」への欲望を保ち続けることにあるという意味で、初めから行き詰まる運命にあるのだということを、示唆するものではないだろうか。

本論で概念化した『星へ落ちる』における異性同士のヘテロソーシャルな絆は、「私」と「僕」の非対称的な感情によって構築されているという点や、両者のバイセクシュアリティに対する態度にすら相違が存在しているという点で、セジウィックによるホモソーシャルな絆と対応するような、普遍的な概念ではない。同時に、本稿で提唱した異性同士のヘテロソーシャルな絆は『星へ落ちる』の中で築かれるものであり、バイセクシュアルな三角形における異性同士の絆を一般化するものではない。さらに、本論では「私」と「僕」の欲望の成就の遅延に「彼」のバイセクシュアリティが大きく参与していることを示したが、これはバイセクシュアリティそのものが性的に不確かであることを意味するものではない。前述の通り、金原による叙述技法はむしろ、異性愛/同性愛の二項対立の内部で抹消されがちなバイセクシュアリティの存在感を、語り手としての「彼」を敢えて不在にすることで、逆説的にも増幅させる効果を担うものである。この意味で、『星へ落ちる』はバイセクシュアリティの不可視性という後景化されがちな問題に真っ向から挑み、金原ひとみの作家としての可能性を果敢に押し広げた作品として、評価することができるだろう。

## Author note

本稿の執筆にあたり、2名の匿名査読者より重要かつ有益なご指摘をいただいた。拙稿の理解を押し広げるための貴重なご進言をいただいたことに、心よりお礼を申し上げます。また、名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士前期課程の中山佳子氏、および高島亜理沙氏からも助言を受けた。英文要旨の作成にあたっては、中京大学国際英語学部のChristopher J. Armstrong教授より意義深いアドバイスをいただいた。記して感謝申し上げたい。

**Footnotes**

- <sup>1</sup> 本作では登場人物に名前は与えられず、私、彼、僕、俺という人称代名詞によって物語が展開される。本論では、作中の登場人物をすべて鉤括弧「 」で括ることで、議論上の代名詞との区別を明確化する。

## References

- 池田雄一. (2008). 「悲しきネイション——金原ひとみ『星へ落ちる』」. In 『小説tripper』. 2008 春季号. 東京: 朝日新聞社. 148-150.
- いしいしんじ. (2011). 「解説」. In. 金原ひとみ. 『星へ落ちる』 (集英社文庫版). 東京: 集英社. 177-185.
- 金原ひとみ. (2007a). 『星へ落ちる』. 東京: 集英社.
- 金原ひとみ. (2007b). 「いろんな不健康は書き尽くした……」. In 『Web & Publishing 編集会議』. 第81号. 東京: 宣伝会議. 12-15.
- 金原ひとみ., & 木村美代子. (2009, October 9). 「著名人インタビュー 金原ひとみ」. 『日豪プレス』. Retrieved August 22, 2016, from [http://nichigopress.jp/interview/celebrity\\_interview/2630/](http://nichigopress.jp/interview/celebrity_interview/2630/)
- 斎藤環. (2004). 『文学の徴候』. 東京: 文藝春秋.
- 斎藤環. (2006). 『生き延びるためのラカン』. 東京: バジリコ.
- 斎藤環. (2009). 『「文学」の精神分析』. 東京: 河出書房.
- Butler, Judith. (1999). 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 (竹村和子, Trans.). 東京: 青土社. =(Original work published 1990). *Gender trouble: feminism and the subversion of identity*. London & New York: Routledge.
- Denier, Yvonne. (2007). *Efficiency, justice and care: philosophical reflections on scarcity in health care*. Dordrecht: Springer.
- Garber, Marjorie. (2000). *Vice versa: bisexuality and the eroticism of everyday life* (Paperback ed.). New York: Routledge.
- Girard, René. (1971). 『欲望の現象学——文学の虚偽と真実』 (古田幸男, Trans.). 東京: 法政大学出版局. =(Original work published 1961). *Mensonge romantique et vérité romanesque*. Paris: Bernard Grasset.
- Sedgwick, Eve. K. (2001). 『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』 (上原早苗 & 亀澤美由紀, Trans.). 名古屋: 名古屋大学出版会. =(Original work published 1985). *Between men: English literature and male homosocial desire*. New York: Columbia University Press.
- Žižek, Slavoj. (1996). 『快樂の転移』 (松浦俊輔 & 小野木明恵, Trans.). 東京: 青土社. =(Original work published 1994). *The metastases of enjoyment: six essays on woman and causality*. London & New York: Verso.

- Žižek, Slavoj. (2004, April 19). "From desire to drive: why Lacan is not Lacaniano". LiveJournal. Retrieved August 22, 2016, from <http://zizek.livejournal.com/2266.html>
- Žižek, Slavoj. (2008). 『ラカンはどう読め!』(鈴木晶, Trans.). 東京: 紀伊國屋書店. = (Original work published 2006). *How to read Lacan*. London: Granta Books.



**Research paper: Between (wo)men: The bisexual triangular relationship  
and its 'heterosocial bond' in Hitomi Kanehara's  
*Hoshi e ochiru* [*Falling into stars*].  
Ryunosuke OOKI**

In this paper, I will discuss the bisexual triangular relationship and its 'heterosocial bond' in Hitomi Kanehara's collection of five interrelated short stories, *Hoshi e ochiru* [*Falling into stars*] (2007).

In *Hoshi e ochiru* [*Falling into stars*], Kanehara depicts a bisexual triangular relationship between a heterosexual woman Watashi, a homosexual man Boku and their beloved a bisexual man named Kare. The stronger the rivals empower their love toward Kare, the more they strengthen their rival bonds as strong as (or stronger than) their affection for him. This rival structure can be read as the bisexual version of 'homosocial bond' which Eve K. Sedgwick explores in *Between Men* (1985/2001). According to Sedgwick, in the heterosexual triangular relationship (man—woman—man), the bond that links the two rivals is as intense and potent as the bond that links either of the beloved. Similarly, in the bisexual triangle of *Hoshi e ochiru* [*Falling into stars*], the bond that links the heterosexual woman, Watashi, and the homosexual man, Boku, is constituted as intense and potent as the bond that links them both to their beloved, Kare. To the extent that the rivals make use of homophobia and heterophobia/misogyny to exclude their hetero-erotic possibility and shape the social and emotional connection, I will call this relationship—ties between persons of the different gender/sexuality that are not of a romantic or sexual nature in the bisexual triangular structure—a 'heterosocial bond.'

Through the heterosocial bonds in the novel, however, both Watashi and Boku somehow seem to actively avoid receiving love from Kare. This inscrutable conduct can be understood by reference to Slavoj Žižek's reading of Lacanian desire. In *The metastases of enjoyment* (1994/1996), Žižek indicates that what the subject desires is not to gratify his/her desire but to sustain

desire itself, in order to postpone the dreaded moment of its satisfaction. That is, for Watashi and Boku, they must utilize the heterosocial relationship to postpone their fulfillment so as to retain her/his desire itself. This structure also signifies that the bisexuality of Kare functions as the obstacle which precludes rivals from satisfying their heterosexual/homosexual desire in the sense that bisexuality cannot apply to the binary of heterosexual/homosexual. Additionally, while Watashi and Boku appear as the narrating subjects in the short stories, Kare is only ever the object of narration. His absence as narrator can be interpreted as a Lacanian *objet petit a*, which connotes the object-cause of desire and the originally lost object. Because Kare functions as *objet petit a*, both Watashi and Boku are able to maintain their 'heterosocial bonds' continuously and postpone the satisfaction of their desire itself. In order to clarify these points, I am going to analyze the bisexual triangular relationship in the novel and its 'heterosocial bond' by using Sedgwick and Žižek's theorizations of erotic desire.

**Keywords:**

Hitomi Kanehara, *Hoshi e ochiru*, *Falling into stars*, bisexuality, heterosocial bond